

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(1から17は、段落の番号を表します。)

1 だけだつて「橋」といえば、大水が来ても流されない頑丈な橋がいいと考えます。それなのに、京都にある上津屋橋という橋は、大水が来て川の水がいっぱいになると、必ず流されてしまいます。もちろん、流されるたびに修理をするのですが、それでも大水が来れば、また流されるのです。ですから付近の人々は、この橋のことを「流れ橋」と呼んでいます。

2 ところで、この「流れ橋」は、どうして流されないような頑丈な造りにしないのでしょうか。

3 「流れ橋」は、京都の南を流れる木津川に架けられた、長さ三五メートルという、とても長い木造の橋です。木津川の源は、奈良県と三重県に広がる奥深い山岳地帯です。ですから、大雨が降ればたくさんの水を集め、ふだんは静かに流れている木津川もたちまち「暴れ川」となります。

4 「流れ橋」のある所は、地名を上津屋といい、ちょうど木津川を境にして、東側が久御山町、西側が八幡市です。八幡市には、一〇〇年ぐらい前に建てられた有名な岩清水八幡宮があります。東の方から参拝に来る人は、どうしても木津川を渡らなくてはなりません。この場所に「流れ橋」が架けられたのは、昭和二十六年(一九五一年)だといいます。それまでは、舟で渡っていたということです。

5 木津川のこの付近は人家も少なく、広い川原にはアシなどが茂り、昔ながらの光景が残っている所です。そんな光景の中に「流れ橋」が一つ、何十もの太い木の橋脚に支えられ、まっすぐ木津川を横切っています。

6 現在の橋は、普通、鋼鉄や鉄筋コンクリートで造られています。が、「流れ橋」は路面に敷き詰められている橋板も、それを支えている橋げたや橋脚も、皆、木で造られています。ただ、東側の十七本の橋脚だけは、川の本流の中にあるため、鉄筋コンクリート製になっています。

7 「流れ橋」の橋板は、橋げたの上に打ち付けてありますが、おもしろいことに、その両側には鉄の環が打ちこんであつて、それに太い鉄のロープが通してあります。その鉄のロープは、たどっていくと途中で橋の裏側に回り、橋脚に固く巻きつけてあります。

8 橋の下から見てみると、太い橋げたは橋脚の上に載せてあるだけです。普通の木造の橋の場合、橋げたと橋脚とは、かすがいやほぞなどで、互いに離れないように固く留めてしまいます。ところが、「流れ橋」の場合は、橋げたはその重みで載せてあるだけです。川の水が増えてきて橋げたのところまできたら、木の橋げたは水にぼっかり浮いて、流されてしまいます。

9 そのまま流されてしまったら大変です。そこで、鉄のロープの一部は橋脚にがっしりと巻きつけておくのは無理なことですから、四十メートルから五十メートルでくぎり、八つに分けてあります。

10 大水で水かさが橋げたまで届くようになると、つながれた橋板と橋げたが、流れに沿って川の中に八つ、縦に並んで浮くことになり。水が引いて川がもとの静かな姿にもどったら、それを引っぱり上げ、壊れた部分は修理して、もとのように橋脚の上に載せればいいわけです。

11 「流れ橋」を管理している京都府の田辺土木事務所たなべの記録によりますと、昭和二十六年に「流れ橋」が造られて以来、台風や集中豪雨で、すでに十回も流されています。

12 台風で恐ろしいのは、強い風はもちろんです。狭い地域に、短時間でたくさん雨が降ることです。梅雨つゆの時の集中豪雨もそうです。こうした大雨で川の水が急に増えれば、洪水が起きます。洪水にならないようにするには、増えた水の分だけ、どんどん海に流れてくれればいいわけです。

13 このことだけを考えてみれば、川の流れの幅が十分に広く、そして流れの途中にじゃまするものがなければ、水はよく流れ、堤防から水があふれ出すこともなくなります。しかし、私たち人間は、生活の必要から活動する範囲を広げ、便利にするために、川には橋を架けました。幅の広い川では、つり橋は別ですが、途中に幾つもの橋脚を立てなくては、橋げたを渡すことはできません。

14 「流れ橋」は三五メートルもの長い木の橋ですから、橋脚は七十三基あります。橋脚と橋脚の間は五メートルぐらいです。もし、橋げたが流されないとしたら、川の中に幅約五メートルの「門」が七十四個、横一列に並んでいるのと同じことになり。これは、水の流れをじゃまする大きな障害物となります。じゃまする度合いは、水の流れが速くなるほど大きくなります。まして大水のときは、上流から大きな石ころや樹木など、いろいろなものがたくさん流れてきます。それらが、「流れ橋」の、橋げたと橋脚とでできる「門」に引っかかれば、流れ口をふさいでしまい、ちょうどそこがせきになってしまいます。そうなるが大変です。水かさは急に増加し、堤防を越えてあふれ出すことになります。

15 そこで、いざというときに川の流れをじゃましないようにするため、橋げたが橋脚からはずれるような構造の橋にしたのです。昭和二十六年ごろは、戦争が終わってまだまもないころでしたから、木材を手に入れることが困難な時代でした。橋板と橋げたを鉄のロープで橋脚につないでおけば、流されてなくなってしまうことはありません。「流れ橋」は、木材を節約するうえからも工夫された橋でした。

17 「流れ橋」は、今の鋼鉄や鉄筋コンクリートの橋とは違って、自然の猛威に立ち向かってこらえるのではなく、流されながら、自然の猛威が収まるまで我慢している橋なのです。この「流れ橋」の姿には、私たち人間が自然とどのようにつき合ったらいいか、一つの考え方が示されているのではないのでしょうか。

(大竹三郎「流れ橋」による)

(注1) かすがい||材木などをつなぎ留めるための、コの字型の金物。

(注2) ほぞ||材木を接合するとき、片方の材の端に作る突起のこと。

一 線部「大水が来ても流されない頑丈な橋」とは具体的にどんな橋を指しますか。文章中から十三字で抜き出してください。

二 1 段落につける見出しとして、もっとも適切なものを、次の1から4の中から一つ選びなさい。

- 1 「流れ橋」の被害
- 2 「流れ橋」の言われ
- 3 「上津屋橋」の利点
- 4 「上津屋橋」の危険性

三 線部「流れ橋」とはどんな橋のことですか。「流れ橋」の説明として当てはまらないものを、次の1から4の中から一つ選びなさい。

- 1 路面に敷き詰められている橋板、それを支えている橋げたや橋脚などは、ほぼ木で造られている。
- 2 京都の南を流れる木津川に架けられた、長さ三五メートルの、とても長い木造の橋である。
- 3 長い橋の橋板と橋げたを一本のロープでつなぎ留め、橋脚に巻きつけて流されないようにしている。
- 4 集中豪雨による洪水をさけるためにも、木材を節約する上でも、流される構造になっている。

四 線部「流されながら、自然の猛威が収まるまで我慢している」の部分に使われている表現技法を答えなさい（漢字、ひらがなのどちらでもよい）。

五 この文章を読んで、あなたが感じたことや考えたことを、次の条件1から条件3にしたがって書きなさい。なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件1 本文を引用して書くこと。引用する部分は、かぎかっこ（「」）でくくること。

条件2 この文章についてあなたが感じたことや考えたことを具体的に書くこと。

条件3 八十字以上、百字以内で書くこと。